



国立大学図書館協会
Japan Association of National University Libraries

第68回総会研究集会
「国立大学図書館協会ビジョン2020から2025へー振り返りと展望ー」
第1部 「ビジョン2020」を振り返る

ビジョン2020に係る 委員会活動の総括と 各会員館の取り組み

国立大学図書館協会事務局
久保田 壮活
(東京大学附属図書館 総務課長)



委員会活動の総括

- 総務委員会
- オープンアクセス委員会
- 学術資料整備委員会
- 学術情報システム委員会
- 図書館環境高度化委員会

ビジョン2020の推進と、全体の統括

1. ビジョン2020の推進

ビジョンパンフレットの発行



報告書の発行

✓ 平成31年2月

「協会ビジョンに基づく各会員館の活動状況(中間まとめ)」

平成30年12月から31年1月にかけて各会員館に取り組みの報告を依頼し、まとめたもの。

✓ 令和3年6月

「ビジョン2020評価・総括および会員館の取り組み事例」

ビジョン2020の達成度を確認するべく、各委員会による評価・総括、会員館の取り組み事例の照会を行い、まとめたもの。

ビジョン推進にかかる予算措置

✓ 平成29年度

「オープンサイエンス関連管理職員海外派遣事業」

(平成30年2月4日～11日 オープンアクセス委員会)

「これからの大学図書館を考える」地区ワークショップ

(平成30年3月9日・16日 図書館環境高度化委員会)

✓ 平成30年度

「学術情報システムの今後の方向性に関する研究事業」

(平成30年7月～令和元年5月 学術情報システム委員会)

✓ 令和元年度～2年度

国大図協シンポジウム(学術資料整備委員会(電子ジャーナルWG))を開催予定だったが、コロナ禍のため中止

総務委員会

2. オープンサイエンス推進

✓ 平成31年3月

「国立大学図書館のオープンサイエンスへの取り組みー研究成果と学術情報のより幅広い共有と活用に向けてー」を公表。

✓ 令和元年12月

「オープンサイエンスの推進に向けた協会の行動計画」を公表。

✓ 令和2年度

「オープンサイエンスの推進に向けた協会の行動計画にかかる予算措置」として先進的事業の推進のため、協会予算の一部を充当し、会員館の優れた計画に対して助成を実施。

九州大学「研究データの管理・公開に係る研究者向けeラーニング教材の開発」

3. 従来からの事業

✓ 国立大学図書館協会協会賞

✓ 海外派遣事業

✓ 地区助成事業

✓ 国立大学図書館協会シンポジウム

4. 広報活動

✓ 協会ロゴマークの制定(平成29年6月)

✓ 協会ウェブサイトのリニューアル
(平成30年6月)



～次期ビジョンへ～

✓ 令和元～2年度

総務委員会の下に次期ビジョン策定小委員会を設置して、案を検討。

✓ 令和2年9月

「国立大学図書館協会ビジョンに対する意見等について(照会)回答一覧」

次期ビジョン策定小委員会において次期ビジョン検討の参考とするため、令和2年4月から令和2年5月にかけて各会員館に国立大学図書館協会ビジョンに対する意見等を照会し、とりまとめ。

✓ 令和3年6月

第68回総会に案を上程

オープンアクセス委員会

実現・進展したこと

< 国立大学図書館協会ビジョン2020 >

「重点領域1. 知の共有：< 蔵書 > を超えた知識や情報の共有」
－ 「目標1. 教育成果の発信，オープン化と保存」

- 1. オープンアクセスに係る会員館の活動の現状把握と課題の洗い出し、優先的に対応すべき課題に対する参考となる優良事例の共有**
 - ・ 「オープンアクセスへの取り組み状況に関する実態調査」報告書（平成28年度）
 - ・ 「オープンアクセスへの取り組み状況に関する実態調査（第二次調査）」報告書（平成29年度）
- 2. オープンアクセス及び研究データ管理に関する海外調査**
 - ・ オープンサイエンス関連管理職職員海外派遣事業（平成29年度）
 - ・ 「米国におけるオープンアクセスと研究データ管理」大学図書館研究，2018，No.109.
- 3. オープンサイエンス及び研究データ管理等の推進の指針となる文書の作成、参考となる取組事例の共有**
 - ・ 「機関リポジトリの再定義について」（平成30年度）
 - ・ 「オープンサイエンスに向けて国立大学図書館が担う具体的役割」（平成30年度）
 - ・ 「研究データに関する研究者の実態とニーズの把握のための調査の手引き」（令和元年度）
 - ・ 「研究データのオープン化とそのメリット」（令和元年度）
 - ・ 「オープンサイエンス及び研究データ管理に係る参考となる取組事例」（令和2年度）

オープンアクセス委員会

今後の課題・実現すべきこと

- 当委員会が実施したオープンアクセス、オープンサイエンス及び研究データ管理等の推進に係る活動について、会員館の方針・活動に与えた影響や問題点等に関する検証
- オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）や大学ICT推進協議会（AXIES）等、関連団体との情報共有や強い連携
- 研究データ管理を含む教育研究成果オープン化の推進に必要な人材の育成や、会員館に資する情報を適時に共有する方策の検討

3つのワーキンググループによる、資料とその長期的利用環境整備の取り組み

1. 電子ジャーナルWG

- 平成29年度国立大学図書館協会シンポジウム「電子ジャーナル購読をめぐる課題－サステイナブルな学術情報流通のために－」を開催し、電子ジャーナルの契約変更の事例報告を行った。



- 『大学マネジメント』2019年11月号に、電子ジャーナル問題特集を企画し、広く大学関係者や社会に向けて問題提起を行った。
- RAPモデル等新たな契約の在り方についてのアンケートを実施し、結果を広報誌『jusmine』第40号（令和3年3月）へ掲載した。

学術情報流通にかかる問題の共有と
解決に向けた取り組み

2. デジタルアーカイブWG

- 大学図書館で取り組むべきデジタルアーカイビングについて検討を行い、平成30年度国立大学図書館協会シンポジウム「大学図書館デジタルアーカイブの活用に向けて」を開催した。



- 令和元年6月に、デジタルアーカイブ利活用のための課題と方策をまとめた報告書「大学図書館におけるデジタルアーカイブの利活用に向けて」を作成・公開した。

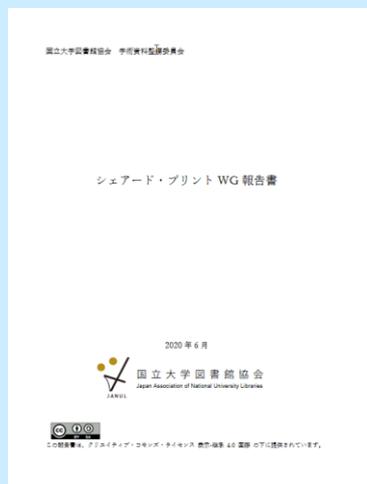
報告書URL

https://www.janul.jp/sites/default/files/2019-07/sr_dawg_report_201906.pdf

デジタルアーカイブの利活用促進

3. シェアード・プリントWG

- 東海北陸地区のWGと連携して、図書館資料の分担保存の検討を行い、並行して地区共同保存書庫の設置を想定した運営に係る課題検討を行った。
- 資料分担保存のシミュレーションや共同保存書庫設置の調査・検討結果をまとめた「シェアード・プリントWG報告書」を作成し、令和2年6月に公開した。



報告書URL

https://www.janul.jp/sites/default/files/sr_spwg_report_202006.pdf

冊子体蔵書の分担保存・共同利用
環境構築に向けた提案

◆◆ 今後の課題 ◆◆

学術資料整備委員会では、1～3の活動のほか、コロナ禍をきっかけとした学習環境・学習方法の変化と、電子リソースへのニーズの高まりに対応するため、国内の学術書の電子書籍化推進と、その長期的な利用環境の構築についても検討を進めてきた。

これまでの活動を総括し、当該目標において次期ビジョン期間に引き継ぐべき課題として、以下のことが挙げられる。

- 電子ジャーナルや電子書籍等、教育・研究に必要な電子リソース整備にかかる諸問題**
 - 電子ジャーナルの新たな契約の在り方検討
 - 大学図書館等機関向け国内学術書の電子書籍化促進と利用環境向上
- 資料の長期的利用および共有を実現するための、デジタルアーカイブ構築推進とその標準化**
- ウィズコロナ、ポストコロナ時代の大学図書館における学術資料整備の在り方**
 - 教育学習方法の変化への対応とエビデンスに基づいた資料整備

学術情報システム委員会

<ビジョン>

重点領域1. 知の共有：<蔵書>を超えた知識や情報の共有

目標3) 知識や情報の発見可能性の向上

国立大学図書館は、総合目録データベースをはじめとする学術情報システム基盤を高度化することにより、知の総体を対象として、必要な情報がより効率的・網羅的に発見できる環境を実現する。

活動内容

- 「これからの学術情報システムに向けて－現状・課題・当面の方向性に関するレポート」作成・公表（平成30(2018)年6月）
- 「これからの学術情報システムに向けてⅡ－アクションプラン検討のための試案に関するレポート」作成・公表（令和元(2019)年6月）
- 「図書館システム及び関連システムに関するアンケート」実施・調査結果のとりまとめ・公表（令和2(2020)年7月）

ビジョン2020の目標の中で実現し進展したこと

- 学術情報の探索・発見・利活用のためのシステム基盤の形成全般について広範な調査と研究を実施し、その結果を会員館と共有することにより、会員館における知識・情報の発見可能性向上の取組みを支援した。
- 若手職員によるWGがレポート作成を担い、学術情報システムのあり方や実現計画等について深い考察を行ったことにより、今後学術情報システムの構築に長く携わることができる人材を育成した。

学術情報システム委員会

こうした活動から、以下の目的はおおむね達成した。

<委員会の目的>

- ・各会員館が知識や情報の発見可能性の向上に取り組むための支援を行う
- ・その活動を通じて今後の基盤形成を担う人材の育成を行う

今後の課題・実現すべきこと

- 協会は、必要な情報がより効率的・網羅的に発見できる環境を実現するために、協会自らが行うべき施策を提案する必要がある。
- 今後の学術情報システム基盤を担う人材の育成を継続する。
- 関連団体との連携の方法や役割の切り分けが課題である。それを整理し、情報共有や相互理解の方策を確立する必要がある。

重点領域2 知の創出：新たな知を紡ぐ〈場〉の提供

大学図書館は、これまで人と知識や情報、あるいは人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場であり、知を創出する空間であった。これからは、旧来の「館」の壁を超えてその場を拡張し、さらには物理的な場だけでなく、知のネットワーク上に存在する仮想空間を新たな知を創出するための場として活用することにより、教育・学習の質を向上させ、研究活動を支援するとともに、大学と社会との連携を促す。

- 平成28年度「これからの大学図書館環境を考える」（東京/福岡会場）、平成29年度「これからの大学図書館を考える」（仙台/京都会場）で計4回ワークショップを実施。
- ワークショップにおけるグループワークの成果から、「**新たな知を紡ぐ場**」構築のためのヒントとなりそうなアイデアを、施策例としてまとめた。テーマは、「図書館員による出張サービスも含むピアサポートの積極的な展開」「学内既存コンテンツの掘りおこしと組織化・電子化」「教員の研究成果の組織化と動画等による発信」「各種コモンスの展開やリラクゼーション機能の強化」「地域向けの公開講座やデジタルプラットフォーム提供」「学校図書館支援サービス」など。

(施策例) 「図書館ホリック、これなしではいられない：図書館サービスのワンストップアプリの開発・提供」「学ぶ私の揺りかごから墓場まで」「いきなり図書館ライブ：学内巡回ライブラリー（図書館屋台による学内出張）」「絶対にめっ破りを出さない魔法の図書館：レポート作成環境の整備」「先生（あいつ）普段なにやってんの？大学としての先生の研究成果の共有」など

↑ プレコロナの取り組み

↓ ウィズコロナの取り組み

コロナ禍で大学図書館の場の在り方が大きく変容

楽しげなタイトルが並ぶ。参加者から「制約なく自由にサービスを考える機会が普段はないので、楽しかった」との感想

- 「ウィズコロナの図書館機能を考える」をテーマに、COVID-19下での、安全な①来館型サービスと先進的な②非来館型サービスについて事例収集。
- ① 来館型サービスの状況
緊急休館→郵送貸出・入館不可の予約貸出からスタート（まずは紙媒体の蔵書貸出）→段階的サービス拡大、という事例が多い。ラーニングコモンス等は静粛な自習スペース化（従来型のアクティブラーニングは不可）。オンライン講義受講・オンラインミーティング用スペースの需要増。
- ② 非来館型サービスの状況
電子ジャーナル・電子ブック等の積極的導入やオンラインレファレンス展開、デジタルアーカイブの拡充等。オンラインサービスの利用ガイドが多くの大学で急速に充実。電子ブックだけでは不十分（出版タイトルが少ない（特に和書）、図書館向けタイトルが少ない、高額）。

アフターコロナの課題として考えていること

＜短期的課題＞

- ・コロナ収束後にキャンパスに学生がどこまで戻ってくるか？
アクティブラーニングの場はラーニングコモンズに戻ってくるのか？ 仮想空間に場は移るのか？
(授業は対面重視なのか、オンライン重視なのか、大学によって方針に違いが出てくるかも・・・)
← オンライン重視でも、受講場所・学習場所のニーズはある(館内スペースの見直しが必要)。
紙媒体の図書館資料(レガシー)の必要性は当面残る。
- ・コンテンツはどこまでキャンパス外にデリバリーできるのか？
紙媒体は郵送コストがハードル。なかなか導入が進まないオンライン決裁も課題。
電子送信はどこまで可能か？ NDLサービスはどこまで活用できる？ 著作権処理代行サービスは可能？
電子ジャーナルは、ほぼ提供できている。電子ブックのタイトル不足の問題は解決されるのか？
古典資料等のデジタルアーカイブはどこまでも積極的に進めるべきだが、ハードルは作成コスト。
授業コンテンツ作成は支援すべき？ 普通のPC作成コンテンツでも授業用途なら十分か？
- ・人的支援サービスはどこまでオンライン提供できるか？ (オンライン化で学外人材の活用も容易に)
→ 情報検索、ライティング、学習相談、留学生サービス、キャリアアドバイジング・・・

＜中期的課題＞

- ・「知を創出する場」を仮想空間上に提供できるか？ 電子的なコンテンツ提供やオンラインのレファレンスサービスなどは各館で積極的に進めても、「場」は作れていないのでは？
← 作れていないのは技術の問題？ 予算の問題？ サービスデザインの問題？
(そもそも実空間で、図書館はどこまで「知を創出する場」となりえていたのか？)
- ・物理的な図書館空間は拡大？ 現状維持？ 縮小？ 有限のリソースをオンラインサービスに向けるのであれば、効率化・合理化の上のサービス整理も検討すべきか？
→ 無人化、閲覧席削減と集中化、資料の積極的廃棄・消耗品化、図書館スタッフのテレワーク・・・

＜長期的課題＞

- ・大学の活動の物理的空間からデジタル空間への移行が加速化、その中で図書館がどのような役割を担うことが可能なのか、場・コンテンツ・人的サポート等をどのように提供していくべきなのか、単なるニーズ・シーズ分析にとどまらず、大学図書館の原点にたちかえって議論することも必要か？

各会員館の取り組み



国立大学図書館協会
Japan Association of National University Libraries

協会ビジョンに基づく会員館の取り組み 一覧

照会期間:令和2年12月21日~令和3年2月26日

25大学 58事業の情報提供(自薦)

- 19事業 ← 重点領域1.知の共有:<蔵書>を超えた知識や情報の共有
 - 目標1)教育研究成果の発信、オープン化と保存
 - 目標2)出版された資料の整備と利用
 - 目標3)知識や情報の発見可能性の向上
- 23事業 ← 重点領域2.知の創出:新たな知を紡ぐ<場>の提供
 - 目標1)知を創出する場の拡大・整備・提供
 - 目標2)社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
- 16事業 ← 重点領域3.新しい人材:知の共有・創出のための<人材>の構築
 - 目標1)新たな人材の参画
 - 目標2)国立大学図書館職員の資質向上

各会員館の取り組み



国立大学図書館協会
Japan Association of National University Libraries

重点領域1. 知の共有: <蔵書>を超えた知識や情報の共有

目標1) 教育研究成果の発信、オープン化と保存

目標2) 出版された資料の整備と利用

目標3) 知識や情報の発見可能性の向上

- オープンアクセス、オープンサイエンスの推進
- デジタルアーカイブの構築と活用
- 機関リポジトリの機能強化
- 読書バリアフリー法に対応した所蔵資料の電子化

各会員館の取り組み



国立大学図書館協会
Japan Association of National University Libraries

重点領域2. 知の創出: 新たな知を紡ぐ〈場〉の提供

目標1) 知を創出する場の拡大・整備・提供

目標2) 社会に開かれた知の創出・共有空間の提供

- アクティブラーニングスペースの整備、スマート化
- 地域連携事業の実施
- クラウドファンディングを活用した財源確保

重点領域3. 新しい人材: 知の共有・創出のための〈人材〉の構築

目標1) 新たな人材の参画

目標2) 国立大学図書館職員の資質向上

- 教員、URA、学生、留学生等と協働した人材育成プログラムや、学習支援事業の実施
- 専門研修、SDを通じた職員の資質向上
- 職員の専門性向上につながる業務の集約化、組織体制の見直し